

ローレンス・オリファントに於ける転石の苔

—— 中国・日本遠征に至るまでの
冒険作家の性格形成を中心にして ——

A STUDY OF LAURENCE OLIPHANT

His Moss - Gathering Instinct and its Formation up to the China Japan Mission

宮 澤 眞 一
Shinichi Miyazawa

- I 冒険旅行家の成長 —— Education by contact
- II 冒険家の紀行記 —— Adventurer in quest of something to write
about
- III 中国・日本遠征 —— It prostitutes tobacco to drink and talk over it
注

幕末に二度にわたって来日したローレンス・オリファントは、主として1858年のエルギン卿使節に随行したときの出来事を伝えた二巻本の紀行記によって、近代日本史に名前を残しているけれども、『冒険生涯のエピソード』と題した自叙伝に、「或いは転石に付いた苔」と副題で解説しているように、来日前のオリファント青年と言えは世界各地を渡り歩き、それも民族対立や反乱の緊迫した現場ばかりを嗅ぎつけては急行する冒険作家として知られていた。あまりに各地を転がり廻るので、一体どのような生活のステップを歩んだ人なのかよく分からない。冒険家、法律家、外交官、スパイ、特派員、紀行作家、小説家、社交家、国会議員、宗教家、事業家、など様々な仕事をその間にしている。本人としては様々な体験を各地でしたからこそ、知恵という苔が付いた、と言いたいのであろうが、1860年代に入ると、奇妙なハリス宗教集団に加わるという形で、この苔は具体的な一つの形に現れることにもなる。本稿では、一見不可解に見える冒険家の生涯について解

明の糸口を探るために、来日に至るまでの性格形成を中心に論じ、自己分析の深化に焦点を当てる。

Laurence Oliphant visited Japan twice toward the end of the Shogunate's ancient regime and has been since known in Japan almost exclusively for his recording of the Elgin Mission in 1858. This study is to focus on his character - formation in childhood and youth under the influence of his mother, leading eventually to their joint commitment in the Harris' queer religious society of the New Life in the 1860s.

I 冒険旅行家の成長

Education by contact

『冒険生涯のエピソード』と題したローレンス・オリファント (Laurence Oliphant: 1829 - 1888) の自叙伝には、「或いは転石に付いた苔」という副題が付けられた¹⁾。そこで自叙伝を切り出すにあたり、西洋諺にある「転石、苔を付けず」(A rolling stone gathers no moss) の意味を最初に解説することから始めている。西洋人の生き方は一般的に転石になりがちである。あちこちに放浪するばかりでは苔の蓄積(富)が生まれない、と自戒する諺である。

それにしても、転石とはいかにも西洋人の考えそうな諺ではないだろうか。逆に苔とは、西洋的でなくいかにも日本的、と見なしたくなる気持ちが日本人にはある。実際、苔に関しては英米文学史のなかで、苔に愛着を示した作家の例を拾い出そうとしても、墓碑の刻みにむした苔を「金モール」²⁾と呼んで瞑想してみせたナサニエル・ホーソンなどが、むしろ例外的な存在であるように思える。

苔むした石とは日本的な趣味だ。苔の付いた庭石を伝統的に大事にしてみたり、一定地域に定着して暮らしてきた日本人の島国的な生活感覚からすれば、苔はともかく、転石などはとても思い付かない。遊牧民族の発想によって生まれた諺と言うべきであろう。それだけに、この諺の逆説を行こうとする副題は、オリファントの人生を象徴する言葉として、

英国読者には当を得たものに思えたであろう。そのことを本人が一番よく自覚しているという点でも、興味深いタイトルなのである。自己分析評価の徹底振りがここから推し測れるためだ。それに、世界の各地を転がり廻ってみたくなるほどに、冒険に誘い出す未知の土地が未だ残っていて、波瀾に浮沈するヴィクトリア朝後半に生きたオリファントの時代相を的確に伝えていえると思えるためでもある。

自叙伝の書き始めは10代の1841年末セイロン行きになっている。そればかりでない。オリファントによる他の著作や文章のどこにも、この12～13歳に至るまでの成長期を述べたものが見当たらない。転石のように動き廻るこの冒険家の性格が、どんな生い立ちによって形成されたかについて知りたい読者は、この場合、伝記に頼るしかないのだ。

二種類の伝記が利用できる。一つには、早くから発表されていた遺族公認の伝記、所謂 authorized biography がある。多作な女性の大衆小説家の一人であった従妹のマーガレット・オリファント・W・オリファントは、オリファントの他界して間もない1891年に、二巻本の『回想——ローレンス・オリファントの生涯』³⁾を纏め上げた。波瀾万丈の生涯を送ったオリファントについての評判は親族のあいだで悪かった。両親はともかく、大方のオリファント一族から見ると、鼻つまみ者として扱うべき迷惑な存在であったそうだが。そこでこの女流作家は「彼の思い出を世間の誤解から守るために」⁴⁾ペンを執ったというのである。

逸脱して突飛な行動に走るオリファントを一方的に非難するのではなく、どこまでも好意的に理解しようとする温かさが、終始、感じられる一方で、遺族公認の伝記にしばしば見受けられる欠陥は、ここにも露呈してしまっている。それも濃厚に、太い線で、と言ってよい。オリファントの名誉を守ろうとする余りに、赤裸々な人間像を刻めていない。

後年の伝記作者の立場では、こうした目的意識など皆無になるのだから、より実像に近いかたちで伝記の主題に迫れるはずである。その点でフィリップ・ヘンダーソンが発表した1956年刊『ローレンス・オリファントの生涯』は、一般読者の期待に応えられるものである。しかし、ヘンダーソンがすべての点でマーガレットに優れているかと言えば、そう断言できないところに伝記研究の難しさと面白さがある。マーガレットによる伝記には遺族でしか知りえないとか、書きえないという特色が強く打ち出されているためである。

生前からオリファントの伝記を纏める意図がマーガレットにあったらしいと、読んでいて、そんな思いにさせる節は随所に感じられる。マーガレットは早くから親族の作家同業者の立場を活用して、オリファントの歩む軌跡を断続的に追いかけてつづけた。帰国した折々

に面談を重ねてみたり、一族の人達に会えばオリファントを話題に出して、エピソードを聞き集めてきたようだ。それに繰り返すまでもなく、親族だけにしか利用の許されない資料という点では、遺族公認の伝記作家は、常に特権を享受できる独自の立場にあった。

マーガレットによれば、オリファント家は12世紀にまで遡れるスコットランドの旧家でありながら、歴史に名前を残すほどに華々しく活躍した祖先に欠けるという⁵⁾。次男としてコンディに生まれた父親のアンソニー (Sir Anthony Oliphant: 1791 - 1859) は、エディンバラに出て法律を学び、次第に出世してケープ・タウンで法務長官を務めるまでになった。1828年には同地で72連隊の連隊長キャンプベルの娘マリア (Lady Maria Oliphant: 1811 - 1881) と結婚した。このときアンソニーの年齢は37歳、マリアは17歳であった。20歳という夫婦のあいだの年齢差は、今日思うほど、ヴィクトリア朝英国において異例なことではなかった。それでも、父娘くらいに違っているのであるから、家庭の雰囲気とオリファントの成長に大きく影響した。活発で若々しいマリアは、温厚で誠実な人柄のアンソニーと一緒に、活気に満ちた楽しい家庭生活を形作れたようである。

1829年、ほとんどハネムーン・ビービーのような恰好でケープ・タウンに誕生したオリファントは、一人っ子として二人の寵愛を欲しいままにして育つ。特に母親は18歳しか離れていない我が子を溺愛してしまい、絶えず身近に置きたがった。それが生涯つづいた。そればかりか、成長する息子の心のなかの動きまでも、つぶさに掌握していたかったようである。母親の一心同体の願望は、後に触れるように、オリファントの生涯に明暗を投げ掛ける結果となった。

波瀾と活気に満ちた道に走ることになる冒険家の側面には、このように快活で若々しい母親の影響がある、とマーガレットは見ている。オリファントの性格に窺えるもう一つの特徴であり、また後年の人類愛に生きることになる求道者の横顔には、父親譲りのユーモアに満ちた温厚さや誠実さの影響があると、マーガレットは感想を述べている⁶⁾。オリファントの性格形成において決定的な要因として指摘できるものは、このような両親の性格とそれに二人の築いた家庭生活ばかりではない。ここでは更に二つの要因を挙げておきたい。

一つには宗教面であり、性格的には言えば、求心力的な傾向を発揮する要因である。他方は教育面であり、遠心力的な要因と言える。敬虔なキリスト教徒の両親は、ヴィクトリア朝中産階級の家庭に特徴的に見られた厳格さを未だ捨て切れていない。自分の内面を監視する厳しい視線に緩む隙がないほどであった。いつの間にか根を張りかねない悪の動きに脅えたり、警戒しては日々を過ごした。そんな両親、とりわけ母親マリアによって、厳

しい自己分析の性向が、幼い頃からオリファントの内部に仕込まれてしまう。青少年期などには時として厳しすぎるとオリファントは嫌がってみせたものの、結果的に一生のあいだ、自己の内面を執拗に分析しつづけ、独自の求道の方法を模索したと言ってよいであろう。

自己分析の性向には求心力的な動きがあるのに対して、オリファントにはそれと正反対の方向に、矛盾するかのような力学がたえず働いていた。遠心力的な動きが顕著なのだ。誕生から青少年期に至るまでのあいだに両親のもとで受けた教育の形が深刻な影響を与えた。絶えず新しい興奮や危機を求め、自分の外部へ飛び出していく体験的な冒険家の性格が植えつけられてしまったわけである。マーガレットはこれを「接触による教育」⁷⁾と呼んでいる。別な言い方をすれば、オリファントの両親は、通常の学校教育というものをほとんどオリファントに与えていない。本来であれば、家柄や職業選択からして、オックスフォード大学かケンブリッジ大学の教育を受けるはずであるのに、オリファント自身にしても、進学チャンスを自ら捨ててしまい、度重なる外国旅行という転石の体験学習法を選んだ。

1829年にケープ・タウンで誕生したことはすでに述べた。奇異なことに、誕生日についてはマーガレットにもヘンダーソンにも記載がない。同様に、その後 MARIA とオリファントの健康を理由に、母と息子だけが英国へ帰国することになるけれども、両者の伝記は帰国の年号を記していない。今のところ1837年頃、オリファントの8歳時分と推定するばかりである。

二人の帰国した後に、父親のアンソニーはセイロン島のコロomboに栄転して、セイロン島最高裁判所長に就任した。他方、帰国したオリファントは、ソールズベリー近くのダーンフォード・マナーに開設していたパー私塾の寄宿生となり、初めて公的な教育を受け始める⁸⁾。算数が不得意であったというし、特別な才能を発揮することもなかった。恐らくこの寄宿舎生活も長くは続かず、せいぜいのところで2～3年どまりであろうから、所謂公的な教育は、生涯この短期間に限られている。後はウィンブルドンに住む叔父のもとに引き取られ、オックスフォード大学出のゲップという青年から個人教授を受けた。母親の MARIA が1841年中にセイロンへ渡ったために、保護者の役を叔父が買って出たものと見える。ここも数カ月の短い滞在に終わった。結局、一人息子を溺愛する母親は、片時もオリファントから離れていられず、同年1841年の年末までに、家庭教師役のゲップに付き添われたオリファントは両親のもとへ向かう。モカやアデンを経由する異常に長い三カ月⁹⁾の

旅の後にセイロンへ到着した。

ケープ・タウンに生まれ、幼くして英国へ渡り、それも数年の滞在の後に、12～13歳でセイロン渡航になる、という順番を並べあげてみれば、誕生したときからたえず異国的な外界に視覚を曝して成長したことは一目瞭然である。一定の場所に定着して育つ暇の与えられない根無し草なのだ。このように見てくるとき、転石の生涯は、自分で選択した道というよりも、両親の選択や影響のもとに始まった運命と言うべきであろうか。

「私たちの年令差は18歳だけさ」¹⁰⁾ というのが、母マリアに対するオリファントの口癖であったそうだ。余裕のある植民地生活のなかで、それも宗教的な自己分析など気候的に馴染まない南国の生活環境のなかで、まだ若々しい母親のマリアは、思春期を迎えようとしていた息子をあたかも年下の友人か恋人に接しているかのように、陽気に寛大に扱いがちだったようだ。

女性的な雰囲気の中で伸びやかに成長できたこのセイロン時代は、後年のオリファントが宗教的女性観に進んでいく甘味な下地を形成したと思えてならない。更に、この頃にはインドのオカルト宗教を学び始めていたという父親¹¹⁾ によって、オリファントの宗教観がどのように感化されたか、についても推測の域を出ない事柄に違いないが、どうやら家庭内における厳格なはずのキリスト教の実践は、東洋生活のなかで大きく変化する徴候をすでに垣間見せていた、と判断すべきである。

セイロン滞在が4年ほどになる1846年には、二年間の有給休暇の許しがアンソニーに下った。「この頃、私はケンブリッジ大学に進学する矢先であった。父は母を伴い二年の大陸旅行をするつもりだという話だったので、通常の学問訓練を受けるよりも、教育的観点から見たら、大陸旅行の方が遙かに優っている、と私は熱心に父を説き伏せようと努めてみた。それには母も味方して大いに援護射撃してくれた。」¹²⁾ 自覚的に冒険旅行家の第一歩を踏み出したのは、実にこのときである。「革命の嵐の到来を囁く声はヨーロッパのどこへ行っても聞こえてきた」¹³⁾ 時期にあたり、しかも17歳という多感な年令に達していたから、戦闘の興奮の渦中にオリファントはなんの躊躇いもなく同化してゆけた。

ローマではオーストリア軍を追い払った群衆のなかに飛び込んで、一緒にオーストリア製武器の山を炎上させている。「苔を集める本能」¹⁴⁾ が強いと自認する若きオリファントにとって、ローマばかりでなく、訪れる各地の都市、メジナ、シラキューズやアテネなどにおいても、民族的利害の激しく対立する緊迫現場に引き寄せられていく。生命の危険に晒される現場を嗅ぎつけては、自分から進んで近づき、緊迫する瞬間を目撃しようとい

うのである。政争の論点や主義の主張に基づいて選んだ党派などではなくて、若いオリファントにとって、対立から生まれる緊迫と興奮の渦中に単に飛び込むだけでよかったらしい。無節操なのだ。若さゆえの自然な成り行きによって反乱軍や新勢力の陣営に加担したというに過ぎない有り様なのだ。保守派の陣営よりも反体制派や反乱軍に近づいていく傾向は、その後の活動において顕著に現れる。新しい体制、新しい社会を作ろうとする造形的な関心の萌芽が、このときの体験にあることを指摘しておきたい。

動乱に揺れるイタリア各地を巡った後も、オリファント親子三人の旅は、なお数カ月つづいた。ギリシャからエジプトに至り、ナイル河畔でゆっくりと一カ月の休暇を楽しんでから、ようやく1848年の末までにセイロン島へ戻った。19歳になっているオリファントはこうして大学進学の道を自ら捨ててしまったので、早速の問題は彼の職場探しになった。最高裁判所長の父親は年俸 400ポンドで自分の私設秘書の地位を提案したが¹⁵⁾、同じくらいの年令で1862年に初代駐日英国公使館付き通訳見習い生に赴任したアーネスト・サトウの年俸が 200ポンドにすぎなかったのと比較すれば、いかにも子煩悩な父親による破格な扱いであるかが推測できよう。それでもオリファントは恵まれた多額の給料を遣い果たして、父親に小遣いをせびるというようなこともなく、儉約して貯蓄に励んだ。それも、1850年末のネパール探検旅行を自己資金でまかなえる金額に達するほどになった。

父親のもとで私設秘書をしているあいだに、オリファントは法律を学び、やがてセイロン法廷に出廷する資格を得る。23歳までに年齢と同じ数の殺人事件を扱ったと述懐している¹⁶⁾。父親の公邸が Newera Ellia に置かれていて、コロomboの法廷で活躍するオリファントは、法廷審議の合間にも時間を見つけては、母親に催促されるままに私信による連絡を怠らなかつた。1848年末から1850年末までのセイロン法廷時代には、従って、未だ母親の影響から完全に脱皮できていない。

II 冒険家の紀行記

Adventurer in quest of something to write about

1850年12月にネパール旅行に出発したとき、21歳になっていたオリファントは、ようやく母親の直接的な影響下から脱出して独立できたばかりでなく、自立した冒険家の第一歩

を踏み出した。オリファントの生涯では第二期の幕開けにあたり、この時期の顕著な側面として、作家としての出発も指摘しなければならない。

ネパール旅行は幸運な契機によってもたらされた。親善のために英国まで渡航していたネパール王国の首相 (Jung Bahadour Rana) が、帰路にセイロンに立ち寄った際に、父親から紹介されたオリファントは、首相の貴賓としてインド北部での象狩りとカトマンズ訪問の招待を受けた。英国旅行のあいだにすっかり英国最親になれていたネパール首相としては、活発な英国青年を身近に伴うことで、英国の雰囲気や少しでも長く堪能できる、という程度の気まぐれな提案に過ぎなかったようだ。それでもオリファントとしては、「私に同行してくれというのですよ、それに、本を書けるどんな素晴らしいチャンスであることか」という意味の感想を洩らしている¹⁷⁾。西洋人による未踏査の秘境を探訪する冒険家のスリルに熱中するだけに終わらず、体験記を本に纏めようとする意志はこのように最初から見受けられた。この点に注目したいのである。未だ体験をしていないうちから、体験時のあとの行動までも予定に組み込んでいる。一歩先を見る力と同時に、極めて実務的な計画性が、オリファントの特徴と言えるからだ。

象狩りは命がけの冒険であったので、約束してオリファントを連れ出しはしたものの、首相は現場に来て躊躇したらしい。なにしろ裸の象に一人で乗って、象の群れを追い、密林のなかを疾走するのだ。後にロンドンの社交界に登場したときに、オリファントの得意な話題の一つとなって、人気を高めただけあって、紀行記それにマーガレットやヘンダーソンなどの伝記にも、色鮮やかに描かれることになる。

青年時代のオリファントは機会さえ廻ってくれば、銃を片手に狩りにでかけるほど、狩猟がもともと好きな性質であった。夜中まで藪に隠れていると、水飲み場に集まってくるワニ、それも月光に光る目を標的に射撃したこともあった。相手が獰猛であればあるだけ、殺戮の危険な瞬間に挑みたくなる、という行動パターンが、こうして猛獣を相手にしているあいだにも固まっていく。こうして青年オリファントは、すでに述べた遠心力的な動きの限界にまで挑戦しようとする。ところが、これもすでに触れた性格のもう半面である求心力的な内部に向かう傾向も、同時に活発な動きを見せるのである。限りなく外界に向かう冒険家の行動と、限りなく内部の自己分析に向かう宗教家の性向とが共存しているところに、青年オリファントの極端な分裂構造が顕著に現れ始めている。

自己分析の時間は行動の停止しているあいだに起きがちである。ネパールまでの往復には、駕籠のような乗り物のなかに、一人で閉じ込められ過ぎ時間が無限に長くなる。

「palkeeはたしかに退屈な乗り物です。それに、他のなにものにも増して、否応なしに自分自身と対面せざるを得なくさせます。」¹⁸⁾

このときの自己分析の結果を母親宛の書簡で告白していることは言うまでもない。自分の最大の弱点とは、「良心の順応性ということです。これと結びついているのが、自分のたまたま置かれているどんな仲間にも、自分を順応できるという能力です。どうしてこんな性格になってしまったのか言えば、八方美人でありたいという願望があるからでしょう。他人の感情を大事に思う気持ちに違いないものの、それが他人に好感を持たれるように振る舞う利己的な癖に墮落してしまっています。結局、自分の良心に都合よく合わせているだけのことなのです。なにか自分に達成したい目標があれば、いつもの癖で簡単に周囲に流されてしまう言い訳もなくなるので、そういうときには私はしっかりしていると思います。そうは言ってみても、目標となるものがお金だけなのです。卑しい動機なのです。こういう自分の性格が分かれば分かるほど、軽蔑すべきものに見えてきます。偽善家の深刻さは、自分で自分のことを信用できないくらいです。だから自分のことを余り話題にしない気持ちも生まれます。本当の意味で自分にとって利益になること、それは他のなにものにも増して、決然として神を恐れる人間に成長することなのに、どうして誰も本当の利益に目を閉じてしまうのでしょうか。幸い、宗教はお金目的で手に入りません。そうでなかったら、私はこんなことになる前に、お金を出して買っていたはずです。」¹⁹⁾

目の前にいるどんな相手にも愛想の良い笑顔を向けるという自分に、嫌気がさしている一方で、良心の真に求めている相手である神の声に忠実でありたいとする誠実な姿勢がはっきりと表明されている。緊張した冒険の危険に走るのを好んでみたり、たえず快活に振る舞ってにこやかに接しようとする社交家も、一人心のなかで、幼い頃から母親に仕込まれた自己解剖と求道を怠っていない。それだけに内面と矛盾する外面に悩むようになって、いずれ矛盾の解決を迫られる段階の到来は、この告白のなかにも予想されることだ。親元から離れての旅は初めての体験であって、冒険家・社交家という外面においても、また告白に見られる内省という内面においても、更に作家という一面においても、オリファント青年は約半年の旅のあいだに大きな成長を見せて、1851年夏までに親元に戻ってきた。それからすぐに母親と共に帰国する。

1851年夏の帰国の目的は、旅の途中で記した日記をもとに書き上げたカトマンズー紀行記の出版にあった²⁰⁾。1852年5月には出版社主ジョン・マレーからこの処女作の出版を無事に果たした。無名作家の登場ではあったが、未踏の地の珍しい体験を若々しいタッチ

でユーモラスに描いたドキュメンタリーとして、初版3000部のうち2000部までを10日間に売り捌くほどの好評を博した²¹⁾。気を良くした23歳の新進作家は、「著述の熱病に取りつかれてしまった。」²²⁾ただ問題は次の本で扱う題材探しである。処女作の成功が、「どこか辺境の土地に行って、他に誰もしたことのない冒険をする」²³⁾にあったように、その後のオリファントの筆になる紀行記に、この傾向はパターン化されて受け継がれる。

当時のヨーロッパのなかで辺境の土地と言え、一つにはロシアのラップランドがあった。オリファントの視線はそこに注がれ、1852年の8月にはペテルブルグに彼の姿を見出す早さなのだ。狩りか釣りを楽しみながら、辺境地域の自然や生活を取材するくらいの呑気な気持ちで到着したものの、ペテルブルグで待っていた思いがけない偶然のために、クリミア地方、それも戦闘の前夜の迫るセバストポールに旅先を変更することになった。ここに堅固な要塞を築いたロシア政府は、前線基地として使い、南下してトルコに侵攻し、やがてヨーロッパに覇権を伸ばすのではないかと危惧されていた時期にあたる。

セバストポール要塞に関する情報は、厳重な監視のなかであって、英国政府としてもほとんど把握できていない状況にあった。生命の危険を伴う探索行為は、冒険家的作家のオリファントにとって打ってつけなのだ。

変装して不法進入したオリファントは、ジャーナリストやスパイの体験するスリルを味わっている。「不信と秘密に包まれた」セバストポールの「通りですれちがうどのロシア軍将校も、疑いの目で私を睨み付けるが、恐ろしいことと言ったら私の血を凍らせるほどだった。」²⁴⁾それに湾内に多数停泊している軍艦は、いずれも老朽化していて、戦闘の役に立たない、などの見聞による重要な軍事情報をも伝えている。ときとして謎めいた行動をするように見えるオリファントが、諜報活動の依頼を英国政府から受けていたと言われる所以は、私的に企画したセバストポールの探索に萌芽を見い出せそうである。

ロシア探訪の記録は『黒海のロシア沿岸』と題されて、帰国後の1853年10月にジョン・ブラックウッドより出版されたが、緊張の高まる一方のクリミアについて最新の見聞を伝えているのであるから、同年の12月までに第二版が出版され、1854年3月4日までに四版の印刷に取り掛かる勢いとなった。情報通のオリファントはどこへ行っても引っ張りだこの人気を得た。社交界や新聞界のみならず、始まったばかりのクリミア戦争の戦術を練っていた英国政府としても、オリファントを招いて情報を聞き出している²⁵⁾。このときに初めて具体的な形で英国政府との関係ができた。英国政府関係の仕事は、以来断続的につづき、やがてカナダ、更に中国・日本へと渡航するチャンスを得る。駐日英国公使館書記

官に就任してからは、対馬に不法進入したロシア軍艦を幕府に代わって外交的に処理するまでに発展する²⁶⁾。こうした外交官としての活動に展開していくという意味で、ロシア探訪と探索記録の出版は、オリファントの生涯において重要な転機となった。

24歳までに話題性の高い二冊の本を出版して、一躍時代の寵児に持ち上げられたオリファントは、ジャーナリズム界の有力者たちにも好意的に迎えられた。出版社のジョン・ブラックウッドが発行する月刊誌に連載したり、特派員として「タイムズ」紙から派遣されたり、創刊されたばかりの「デイリー・ニュース」紙に寄稿するようになる後年の動きは、やはり二冊の既刊本の成功がもたらしたものだ。あちこちから引く手あまたの人気のなかで、オリファントにはこのとき今後の進路として幾つかの選択肢があった。

一つには政府の使節に任命されて、紛争地のクリミア地方に派遣されることだ。これには問題点があった。政府決定に至るまでに相当の日数を待たされるのである。もう一つには新聞社の特派員として同じ紛争地に赴く計画が実際に提案されていた。更に、セイロンから帰国した後に続けてきた法律の勉強を活かして、エディンバラないしロンドンで法律家として自立する考えも可能であった。最後に、母親のコネや社交の力で期待していた政府高官の私設秘書があった。宮廷外交の名残りのように、社交界での貴族との付き合いが、特権的なコネ作りに未だ有効に働く時代なのである。

結果的に最後の道を選択することになる。1853年の終わりに一時帰国したカナダ総督のエルギン卿は、私設秘書にオリファントを迎えて、米国とのあいだに通商条約を締結するために、再びカナダへ戻る運びとなる。このときオリファントは英国外務省から正式に派遣された外交官というわけではなかったが、外交畑の仕事に習熟するまたとないチャンスを提供された。それに敬虔なキリスト教徒であり、またオックスフォード出の学識と品格のそなわった温厚な貴族に私的に指導されるのであるから、人間形成の最良の機会に恵まれた。条約交渉の舞台裏で盛んに進められた戦術の一つに米国議員との宴会がある。「エルギン卿はたくさん酒を飲んでいるように振る舞っていますが、私はそんな彼の動きをじっと観察してみました。午後の二時と深夜の十二時まで、彼はグラス一杯も飲んでいないはずと信じるようになりました。とにかく片時も自分の目的を見失うことがないのです——そういう意味では可能な限り完全な外交官と言えます」²⁷⁾と感想を述べている。

一人歩きを始めたオリファントに対する母親の愛着や監視の目は、カナダ時代にも変わりなかった。例えば喫煙にしても、「当分のあいだタバコの心配はありませんよ。第一、エルギン卿は喫煙を嫌っています。それに私としても賑やかな宴会の雰囲気の中で喫煙

する気になれません.... 酒を飲みながらとか話しながらタバコを吸っても、タバコを冒瀆するということです。結局、私は本当に好きでタバコを吸っているのではないでしょう。その証拠に、お母さんから来た先日の手紙にしても、この世に存在する全ての葉巻を吸っても味わえない値打ちを感じましたから。」²⁸⁾

母親の心配はタバコよりもむしろ、年頃に達したオリファントの女性関係にあった。「肉体と血はこのような魅力的な女性たちの群れを目の前にすれば誘惑に打ち勝てません」²⁹⁾と正直に母親に告白しているからである。しかし、当時のオリファントは本気で恋することもなく、むしろ外面の陽気さの陰に潜む自己分析の性向に、一人苦しんでいた。母親の心配は無用なのだ。宴会や舞踏会の後に決まって襲いかかる憂鬱と不安を見てとったエルギン卿などは、激しく入れ代わる気分の明暗を心配して、助言したことがあったらしい。

「私たちの役目は彼らを楽しませればよいだけだ。だから、たとえ自分が今していることに後悔する点が多々あるにしても、それはねえ、今じゃなくて、私としては帰国する船の上でして欲しいな。」³⁰⁾ オリファントにおける外面と内面の二極分解はどうやら深化するばかりで、衰える暇などなかったかのようだ。

通商条約の締結交渉に成功したあと、カナダのインディアン局監督に正式に任命されたオリファントは、権限と責任をとまなう公的な職につけた。ここでも珍しい体験が待ちうけていて、『ミネソタとファー・ウェスト』と題する三冊目の紀行記に題材を提供した。オリファントは生涯に大西洋を22回往復するが、二度目にあたる1855年1月に英国へ帰国する。戻るとすぐに戦争現場のクリミアへ向かった。政府から十分な公的使命や資格を得られないままに出発するという性急さを見せているが、この時点までにセイロンで定年退職した父親を私設秘書のような恰好で伴っていた³¹⁾。オリファントには最初のクリミア探索のときから、ロシアの南下政策を阻止するために戦術拠点としてのCircassia、また具体的な戦術としては、Daghestan に拠点のあるSchamyl 率いる反乱軍との連携が念頭を離れていない³²⁾。しかしオリファントの計画は、思いがけないクリミア戦争の終結によって、あえなく水泡に帰した。失望の苦虫を噛みしめ、1856年初頭までにオリファントは帰国した。

1856年夏に「タイムズ」紙の編集者Delaneに同行したオリファントは、再び渡米する動きを見せるが、どこか不可解さの残る旅に終始した。Schamyl との連携計画で一度空想した軍事行動の興奮と失望を引きずったまま、どこか脈略のない行動に走ったように感じられてならない。すでに触れた性格と行動における二極分解が、すっかり矛盾を深めて

しまい、收拾のとれなくなった状態を想像させるほどだ。母親に告白してかって恥じたことのあるなにか儲け仕事に密かに従事していた節もある。それに、1856年末から1857年にかけては、ヨークー閣將軍による中南米諸国の私的占領³³⁾という冒険的な軍事行動にも参画しているが、その経緯は謎めいている。突飛に見えるオリファントの行動の裏に、「タイムズ」紙か英国政府筋から受けた秘密の依頼が隠されているのだろうか。いずれにしても行動的に走る余りに、内省の冷静を失ってしまっていると思えない不可解な一時期も、軍事行動に参加した途端にあっけなく終わる。密かに追跡していた英国軍艦が介入して、冒険家たちの上陸を未然に阻止したためである。

Ⅲ 中国日本遠征

It prostitutes tobacco to drink and talk over it.³⁴⁾

クリミア探索とアメリカ旅行は、合い続いての失望のうちに、実際に終止符が打たれた。それだけに文筆の成果も捗々しくなく、新聞や雑誌に寄稿記事が掲載されただけである。先行する三冊の紀行記のような著作を生み出せていない。新しい題材探しは、オリファントにとって冒険や未知の体験を同時に意味したから、彼の帰国を待ち受けていたエルギン卿の好意的な二度目の提案に、文字通り小踊りして喜んでいる。再び私設秘書という立場であったけれど、今回は中国行きである。アロー号事件の後始末を付けると共に、中国に対する英国の権益を一層拡大する重大な使命が、エルギン卿使節に課せられていた。

1857年5月20日、使節一行はサザンプトン港を出航して、オーバー・ランド・ルートと呼ばれる地中海・アレクサンドリア・スエズ経由で中国へ向かった。同時に、5000人から成る大量の遠征部隊が、アフリカ南端経由で輸送され、中国でエルギン卿の指揮下に入る計画になっていた。

オリファントはアシュレイ夫人に旅先からの手紙を次々に送って、使節の動きや、各地での生活をつぶさに伝えている。カルカッタからの1857年8月20日付け書簡において、インドで目撃した大暴動についてこう伝えている。

「貴女からいただいた金ペンを今まで使わなかったからといって、貴女のことをすっかり忘れてしまったなんて思わないでしょうね。まったくその逆なんです。貴女にふさわ

しいなにか面白いことが書けるまで、実は、待っていた次第です。それに、この危機的な時点では、どんな内容であれ、カルカッタからのニュースだって、英国の人たちに歓迎していただけるのではないかと思います。

カルカッタにエルギン卿が到着したというニュースを新聞で読まれて、たぶん驚いておられることでしょう。大暴動の勃発が最初に知らされた途端、エルギン卿は中国遠征部隊の目的地を当地に変更いたしました。私どものもとにニュースが届くたびに、事態はますます深刻さを加えましたので、中国問題は延期せざるをえなくなったわけです。

集められるだけの兵力を結集して、二隻の軍艦で直ちにカルカッタに向かいました。最も危機的な時点で、こうしてフューリアス号に急場で投入された三千人の兵力は、大いに役立ちました。私どもが到着したとき、実は、カルカッタ自体が危なかったのです。反乱軍が街のなかへ攻めてくる寸前でした。ようやく最近になって、我が軍によって追い払われましたけれども。。。。」³⁵⁾

エルギン卿は英国を出てから一年余り経過した1858年6月30日に、無事に天津条約の調印にまで漕ぎつけていた。批准書の交換が条約によって予定されている一年後まで、帰国せずに、中国海域で過ごす予定であった。局地的な戦闘以外に、これと言った重大な事態が発生しないかぎり、使節一行は、ただ一年間を待つだけの生活になる。オリファントにとっては、このような無益に待つだけの時間が一方では耐えられなかったらしい。アシュレイ夫人に宛てた書簡に次のように記しているからだ。

「私どもが考えることといえば、英国へ戻ることだけです。でも、この件に関してはエルギン卿をいくら説得しようとしても、同じ考えにできないのです。彼は数々の外交的成功をおさめながら、勝利感を鎮めているように見えます。中国側との条約の詳細が決まるまでは滞在する意向なのです。ブルース氏が迅速に着任されれば、私どもが当地に留まる理由はなくなるのですが.... 外国でのこんな流浪の旅が始まってから、もはや二年近い歳月がたちました。人に忘れられるくらいの長さなのです。」³⁶⁾

オリファントの求心的な動きが活発化するときは、このような手ぶらの暇な状態であることを既に指摘した。やはり中国・日本遠征中に発生した長期間の余暇時間が、彼の自己分析の成功を極端にまで押し進める結果になった。やがてロンドンで遭遇するハリス牧師の影響を受ける心の態勢作りは、この中国滞在の期間に固まっていくのである。この時期に母親に宛てた沢山の書簡のなかに見いだす次のような一節も、冒険の機会を与えられず、外界の興奮に夢中になれる瞬間がないために、豊富な余暇のなかで内省に向かう30歳のオ

リファントの姿を如実に伝えていると思う。

「私の心の状態や経験を振り返ってみますと、幸いなことに、信仰に向かって或る程度の前進をしていると思います。そうは言っても私の生活が、以前にも増して信仰によって深く影響されているというわけでもありませんが。ただ以前との大きな違いはあります。これまでの僕の生活を左右してきたものは、心で確信することの誠実さとか、神の怒りに触れることの不安などでなく、お母さん、全て貴女に惨めな思いをさせることの恐れだったのです。これがなかったら、僕は悪い道に走っていたでしょう...それが今、全て変わってしまったのです。さっきも申し上げたように、私の現在の生活は、以前のものよりも良くなっているかも知れませんが、それでも生活の基盤が前と違うのです、それにどんな世俗的な出来事が起きようとも無関係に、生活基盤はより良い方向に向かうでしょう。」³⁷⁾

日本遠征は英国出発前からエルギン卿使節に課せられた使命の一つであった。砲艦外交など非常手段に訴えることなく、もっぱら外交交渉によって、通商条約を締結する目的があって、英国からわざわざ小さな蒸気帆船まで同伴してきていた。将軍に献呈するつもりで「エンペラー号」である。1855年10月9日に批准書の交換に成功した友好条約から一歩進んで、英国商人の居住と通商を可能にするために、米国の動きに遅れがちな英国政府は、エルギン卿使節の中国遠征の機会を活用するつもりであった。暇を持てあましがちなオリファントたち使節一行に巡ってきた唯一の冒険旅行が、この日本遠征と言える状態にあったから、未知の探訪に大きな期待を寄せた。

オリファントはエルギン卿使節の遠征に参加するあいだに、例によって日記や書簡に詳しく日々の動きや観察を記しておいて、後日に二巻本の『エルギン卿による中国・日本遠征』³⁸⁾に纏める上げる周到な準備を怠っていない。序文には「1859年12月15日、アセニューム・クラブにて」と日付を明記しているが、1859年夏前に帰国してから相当の急ピッチで書き上げたものと見える。第一巻の内容が主として天津条約の締結に至る中国遠征の動きを伝えているのに対して、第二巻の方は265頁までを日英通商条約の締結に至る日本遠征に費やしている。

1858年7月30日に上海を出発して、8月26日には江戸ですんなりと通商条約の交渉に成功して、8月26日に江戸を発って上海到着は9月2日であった。エルギン卿の日本遠征は約一ヶ月の短い期間に過ぎなかった。交渉のみならず、この間の全ての動きがスムーズに進行したので、夏場の暑さに悩まれながらも、遠征に参加した英国人の日本印象は極めて

良好である。ただ一つだけ生命の危険にさらされた時があった。佐多岬沖合で遭遇した大シケである。旗艦「フューリアス号」「リトリビューション号」「リー号」の三隻の軍艦、それに随伴する「エンペラー号」を加えた四隻が日本遠征艦隊を構成していた。

鹿児島湾の喉元で難航している様子は、銅版画のイラストに描かれて「ロンドン画報」の誌上を飾っている³⁹⁾。座礁・遭難などの大きな事故に発展しかねない危険を孕んでいただけに、少なくとも三人の遠征参加者が体験談を残していることが、これまでの調査で分かった。一人は断るまでもなくオリファントであるが、残り二人は、エルギン卿と、旗艦の艦長オズボーンである。同じ出来事をどう受け止め、どのように描いているか、そこからオリファントの性格に特徴的な反応を読み取れるかどうか、興味のあるところなので以下にそれぞれを引用して比較の材料にしてみたい。

先ずエルギン卿は長崎滞在中の8月5日に、次のような日記体の書簡を夫人宛てに書いている。「昨日と今朝、主に買物をする目的で、上陸してみました。中国を見てきた後だけに、長崎の街は驚くほど清潔に見えました。乞食が一人も目に入りません。それに、街の人たちの清潔なこと。それには根拠があります。通りを歩いていてよく目にする光景なのですが、自宅の前の庭か、通りに面した表の部屋で、夫人が行水をしているのです。盥のなかに座って身体を洗っています。女性の清潔感がこのように疑う余地のない視覚的証拠によって立証されている場所は、世界中でほかに見たためしがありません。」⁴⁰⁾

ほとんど外出できないでいたエルギン卿の案内役を買って出たというオリファントも、一緒にこの風景を目撃しているはずであるのに、彼の紀行記は行水の光景に言及していない。エルギン卿の日記体書簡では、翌日8月6日午後4時の日付で、鹿児島湾沖での大シケと緊急避難を次のように簡潔に記している。「日本の最南端の地点に停泊中。終日激しく風が吹いたので、艦長は停泊を提案しました。この地点を迂回しても、高波と強風のために前進できそうにないから、湾内にもぐり込んで停泊することです。強風が静まるまで、ここに留まる予定です。当地の海岸ほど素晴らしいものではありません。今日、幾つかの高い山を通過しましたが、右手の島に見えた山が特にそうですし、左手の日本本土には臼状の高い山がありました。停泊地点から近くの沿岸には、ほとんど住民の姿はありません。小さな漁村が一つあるだけです。昨日は実に多数の和舟がいたのですが、それにしても大変な暑さです。机の前に座ってこうして書くことさえ困難です。」⁴¹⁾

エルギン卿は8月7日午後3時の日付で更に次のように続けている。「同じ地点にまだ停泊中です。嵐はおさまりません。正面からの強風です。私の手持ちの時間は短いので、

無益に浪費するだけの余裕はありません。」⁴²⁾ 呑気に構えているように見えるエルギン卿が、この書簡で述べている「手持ちの時間は短い」というのには、それなりの理由があった。長崎に滞在しているあいだの急な出来事に関連していた。もともと上海出航時の計画によれば、英国の東洋艦隊指令長官だったホープ卿提督が旗艦のカルカッタ号で、先発したエルギン卿一行に合流することになっていた。先発隊を構成する三隻の軍艦では、貧弱な態勢に思われていた上に、ホープ提督の個人的な希望としては、晴れやかな「エンペラー号」献呈を自分の手で行いたかった。それが、広東で再発した戦闘事態のために、江戸訪問の計画を変更しなければならず、ホープ提督自らその旨の連絡のために、長崎に急行してエルギン卿に伝えたわけである。同時にホープ提督は、早めに江戸の交渉を片づけて、中国沿岸警備に戻るようにとエルギン卿一行に指示を出していた。こうした時間的な制約が急に発生したために、のんびりと日本滞在を楽しめなくなるわけである。

このときの遠征艦隊を率いていたオズボーン艦長には、別な理由からの時間的制約が課せられていた。燃料の石炭に限りがあったのだ。嵐のために帆を使えなくなれば、勢い蒸気機関に運行の動力源を依存しなければならない。オズボーンの日本沿海紀行は、エルギンの日記体書簡と違って、明確な日付はないが、大シケの発生から緊急避難にいたる動きについては、ベテランの船長らしい観察力や判断が窺われる次のような記録を残している。

「佐多岬に近づくにつれて、空と海は大変な荒れ模様を呈してきたので、安全な避難場所を早く見つけて停泊する方が賢明であるように思われた。最初の衝動は、北側に湾口に見える鹿児島湾のなかに入り込むことだった。しかし、そこはまったく海図調査ができていない上に、万一にも台風か龍巻のような嵐にでも今の強風が変化する場合に、困った事態になるだろうと予測された。残る選択肢は、日本本土の最南端の風下にどこか停泊地を探すことだ。太平洋の方向から強風が押し寄せてくる、それが風向きを急に变えて東支那海から吹き込んでくるあいだ、その地点に留まりながら嵐に打ち勝つために最善を尽くすことにした。」

「幸いなことに佐多岬から四分の三マイル以内の地点まで来て、良好な停泊地を見つられた。そこで急いで準備に取り掛かり、南西方向に急に風向きを変えかねない強風に備えたが、そうでもしないと、良好な避難場所と今は思っている、それが致命的な風下側の岸になりかねないのだ。夕方近くになって、『リトリビューション号』と小型船『エンペラー号』が西の方向から姿を現した。我々同様に投錨地を探していた。我々の姿を見つけて、進路を変更し、やがて近くに投錨した。この夜、天候はますます荒れて、危険の度

を加えた。気圧計の水銀は、船員仲間の言葉で『ポンプ』と呼んでいる状態、つまり不規則な乱れた動きを伴いながら、激しく上下運動を繰り返すばかり。艦隊の艦船全てにおいて、夜通し嚴重な警戒態勢をとり、蒸気機関も止めなかった。いつでも即座に出航できる状態にあった。それというのも、現在の地点にいるあいだに、急に台風が襲われでもしたら、いくら蒸気機関を備え、錨を降ろしていたところで、抵抗できない圧力によって岩場に叩き付けられるしまうからだ。」

「我々の軍艦から一マイル足らずのところに、小さな湾内にそれなりの規模の村があった。湾の入口には防波堤がある。小石の転がる砂浜に、沢山の小舟が引き揚げられているのが見える。この悪天候のためなのか、それとも人目に付かない彼らの村に、見知らぬ訪問者のヨーロッパ船が急に登場したので恐れをなしたのか。夜になった。暗くて、雨が降り、風は吹き捲くる。そんな嵐の夜にも目を楽しませるものがあるものだ。海岸沿いに無数のかがり火が見える。住民が見張りに付いている証拠だ。荒れた空にかがり火の炎が燃え上がるのを見ていると、見慣れない風景は異国情緒を高めてくれる。8月7日に入っても風に明確な変化はない。ここから乗り出して強風に対抗してみたい誘惑に誰しもかられるのであるが、我々の限られた石炭の量は、今ある分を大事に残しておかねば、上海に戻る保証がなくなる状態なのだ。」⁴³⁾

同じ嵐の場面を伝えるにしても、オリファントは上記のオスボーンやエルギン卿と違っている。とりわけに停泊地の薩摩藩に興味を示している点で特異であるばかりか、後年のオリファントと薩摩藩留学生の間に生まれる友情とも無縁ではなさそうに見える。先ず長崎で得た薩摩藩と藩主島津斉彬についての情報を次のように述べている。

「薩摩藩主は長崎在住のオランダ人の偉大な英雄です。折々に藩主を訪問するように招いています。この藩主は僕たちの長崎訪問の後に他界したとのことですが、最も強力で独立した藩主の一人であるばかりでなく、もっとも開明的な藩主でもありました。娘を嫁がせるなど、先の将軍とも緊密に関係にあり、江戸では大きな影響力を振るっています。」

「薩摩領内には多量の硫黄があるということですから、英国と日本との貿易に於いて一品目になりそうです。領内の南端に位置する硫黄島は、文字通り、硫黄の島ですので絶えず硫黄で燃えているそうです。この島の硫黄鉱山だけでも、銀貨二百箱の年間収入になります。長崎在住のオランダ人紳士、カッテンディーケ海軍大佐から得た情報によりますと、この薩摩の藩主はすでに電信を設置していて、約三マイル離れた鹿児島という城下町と藩主邸のあいだの通信に成功したそうです。それだけでなく、大規模なガラス工場や大砲工

場もあって、八百人の工員が働いているとも言います。」

こうして長崎で得た事前の情報が刺激となって、オリファントには鹿児島を訪れてみたい気持ちが嵩じてきた。恐らく、鹿児島湾内に深く進入して避難場所を見つけるように、オリファントはオズボーン艦長やエルギン卿に進言したことであろう。

「薩摩藩の首都である鹿児島の湾の奥深くまで乗り入れられなかった運命を残念でならない気持ちだった。藩主の邸宅を訪問できたであろうし、藩主の導入したこれらの西洋工芸や技術を直に見聞して、首都の繁栄にすでに大きく貢献している様子を直接見聞できたことと思うからである。」⁴⁴⁾

このようにいかにも残念そうに思い出すオリファントに対して、斉彬はカッティンディーケー一行と同様の友好的な歓迎を示したであろうか。それに斉彬の死が迫っている時期にもあたっている。宇和島藩主伊達宗城に宛てた旧暦7月4日付けの書簡には、「私領土江廿七日碇おろし候」⁴⁵⁾と、エルギン卿一行の緊急避難を伝えているものの、この書簡自体ほとんど絶筆と言えるのである。また、1824年の宝島イギリス坂騒動を一例にとるまでもなく、薩摩藩としては、英国は評判の悪い、警戒を必要とする相手と見なしてきているので、オリファントの希望はいかにも身勝手な楽観的見方に走り過ぎているようだ。そうではあっても、島津斉彬についての好感がいつまでも心に残っていて、数年後にロンドンで生き方に迷う薩摩藩留学生たちと遭遇⁴⁶⁾してから、彼らの世話を進んで引き受けているところに、オリファントに於ける夢の持続と誠実さが感じられる。

冒険家の転石に付いた苔は、この場合、内面的に見たら誠意の確認であり、それが国際的な友情として外面的行為に現れたと言える。

注

1. Laurence Oliphant: *EPISODES IN A LIFE OF ADVENTURE---OR MOSS FROM A ROLLING STONE* (Edinburgh: William Blackwood, 1888). 以下の注では *EPISODES* と略す。
2. Nathaniel Hawthorne: *OUR OLD HOME* (Boston: Houghton Mifflin, 1907),
“Leamington Spa”, p.85. “...beautifully embossed in raised letters of living green, a bas-relief of velvet moss on the marble slab!”
3. Margaret Oliphant W. Oliphant: *MEMOIR OF THE LIFE OF LAURENCE OLIPHANT AND*

OF ALICE OLIPHANT, HIS WIFE (Edinburgh: William Blackwood, 1891), 2 vols.

以下の注では *Margaret* と略す。

4. Philip Henderson: *THE LIFE OF LAURENCE OLIPHANT, TRAVELLER, DIPLOMAT AND MYSTIC* (London: Robert Hale, 1956), p.269. 以下の注では *Henderson* と略す。
5. Ibid., *Margaret*, vol.1, p.4.
6. 上掲書, p.6.
7. 上掲書, p.29.
8. 上掲書, p.17.
9. 上掲書, p.19.
10. Ibid., *Henderson*, p.13.
11. 上掲書, p.14.
12. Ibid., *EPISODES*, p.23.
13. 上掲書, p.24.
14. 上掲書, p.27.
15. Ibid., *Henderson*, p.16.
16. Ibid., *Margaret*, vol.1, p.29.
17. Ibid., *Henderson*, p.17.
18. Ibid., *Margaret*, vol.1, p.49.
19. 上掲書, pp.49 - 50.
20. Laurence Oliphant: *A JOURNEY TO KHATMANDU* (London: John Murray, 1852).
21. Ibid., *Margaret*, vol.1, p.71.
22. Ibid., *Henderson*, p.29.
23. 上掲書, p.29.
24. Laurence Oliphant: *THE RUSSIAN SHORES OF THE BLACK SEA IN THE AUTUMN OF 1852* (Edinburgh: William Blackwood, 1853), p.253.
25. Ibid., *Margaret*, vol.1, p.102.
26. Ibid., *EPISODES*, "A Visit to Tsusima," pp.212 - 227.
27. Ibid., *Margaret*, vol.1, p.120.
28. 上掲書, p.122.
29. 上掲書, p.154.

30. 上掲書
31. Ibid., *Henderson*, p.52.
32. Ibid., *EPISODES*, p.82.
33. Ibid., "Adventures in Central America," pp.107 - 124.
34. Ibid., *Margaret*, vol.1, p.122.
35. British Museum, Add.39168, ff.157 - 9.
36. 上掲資料, ff.165 - 168.
37. Ibid., *Margaret*, vol.1, p.213 - 4.
38. Laurence Oliphant, *NARRATIVE OF THE EARL OF ELGIN'S MISSION TO CHINA AND JAPAN IN THE YEARS 1857, '58, '59*, in 2 vols
(Edinburgh: William Blackwood, 1859).
39. *Illustrated London News*, Nov. 27, 1858.
40. *LETTERS AND JOURNALS OF JAMES, EIGHT EARL OF ELGIN*
(London: John Murray, 1872), p.261.
41. 上掲書, pp.261 - 2.
42. 上掲書, p.262.
43. Sherard Osborne, *A CRUISE IN JAPANESE WATERS*
(Edinburgh: William Blackwood, 1858), pp. 93-5.
44. Ibid., *NARRATIVE*, vol.2, pp.62 - 7.
45. 鹿児島県維新史料編纂所『鹿児島県史料』齊彬公史料, 第三卷(昭和58年), p.1043.
46. 芳即正著『日本を変えた薩摩人』(鹿児島: 春苑堂出版, 1995), p.110.